

【漁況】

[マアジ]

1. 漁獲量の動向（農林統計）

全国のマアジの漁獲量は、昭和40年の53万トンにピークに減少傾向となり、昭和55年には5万4千トンとなりました。

その後増加傾向に転じ、平成8年には33万トンに増加し、平成10年までは30トン台で推移しました。平成11年には大きく減少し21万1千トンとなりましたが、その後ほぼ横ばいで、平成17年は19万4千トンでした。

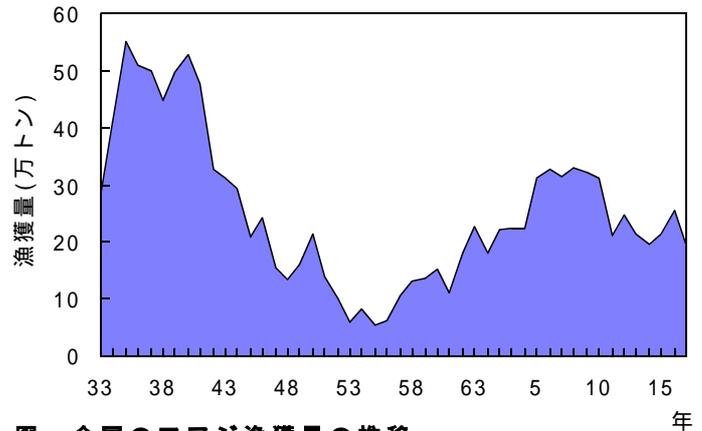


図 全国のマアジ漁獲量の推移

2. 平成19年4～6月期の漁況の経過

【4港計（阿久根；枕崎；山川；内之浦）】

北薩海域では、長島沖、甕東、野間池沖に漁場が形成されました。

薩南海域では、佐多沖に漁場が形成されました。

4港計のまき網では、豆・小アジ(1歳魚・平成18年生まれ)主体に441トンの水揚げで、前年の102%及び平年の42%でした。

3. 平成19年7～9月期の見とおし

漁獲の主体は、アジ仔・豆アジ(0歳魚・平成19年生まれ)で、マアジ小(1歳魚)も漁獲されるでしょう。

来遊量は、前年・平年を上回るでしょう。

(根拠)

漁獲の主体は、近年の漁獲パターンや現在の漁況経過から予測しました。

漁獲主体となるマアジ0歳魚は、6月までの棒受網やまき網への漁獲状況から、低調であった前年、平年を上回る水準であると考えられます。

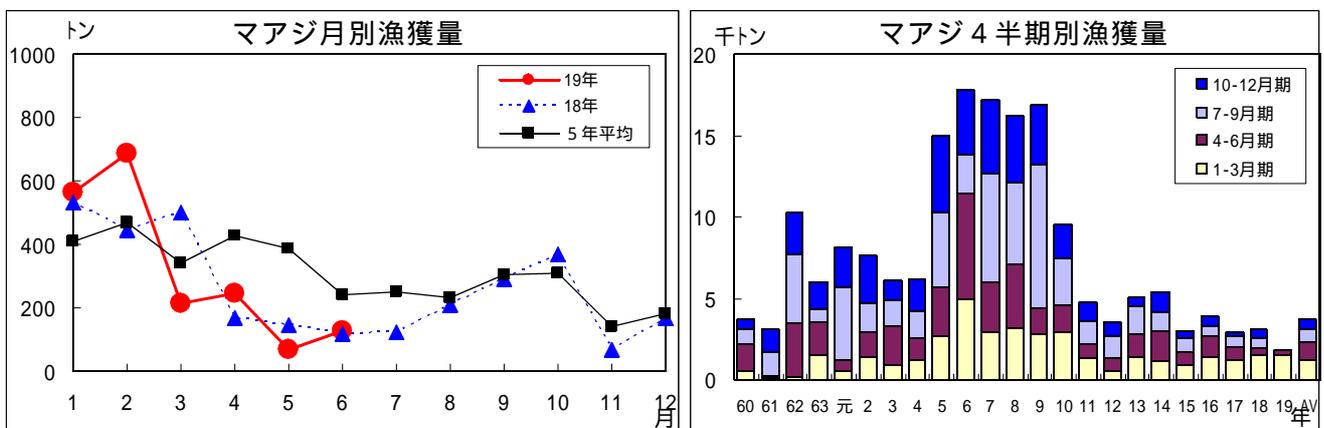


図 マアジまき網漁獲量変化(4港計)

平年値は過去5年(平成14～18年)の平均値、平成19年6月30日までの水揚げ量を使用。

[サバ類]

1. 漁獲量の動向（農林統計）

サバ類の漁獲量は、昭和53年の160万トンを一ピークにマサバ資源水準の低下により年々減少し、昭和57年には72万トンとなりました。その後は、ゴマサバの増加により大幅な漁獲量の減少は見られませんでした。昭和63年以降はゴマサバの資源水準も低下したため、サバ類の漁獲量は大きく減少し、平成3年には26万トンとなりました。平成9年には84万9千トンまで増加しましたが、平成14年は27万9千トンに減少した後、増加し平成17年は60万4千トンでした。

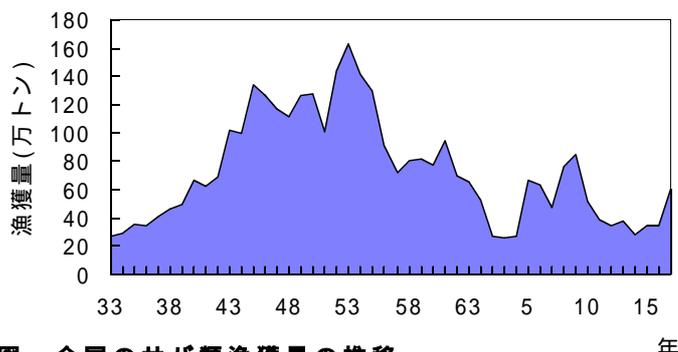


図 全国のサバ類漁獲量の推移

2. 平成19年4～6月期の漁況の経過

【4港計（阿久根；枕崎；山川；内之浦）】

薩南海域に漁場が形成され、馬毛島沖・種子島北・種子島東・宇治周辺が主漁場となった。

4港計では、4～6月はゴマサバ中・中小(3歳魚・2歳魚：平成16年生まれ・平成17年生まれ)主体に6,007トンの水揚げで、前年の74%及び平年の183%でした。

3. 平成19年7～9月期の見とおし

漁獲の主体は、ゴマサバ中小・中（1歳魚・2歳魚）主体で8月以降はゴマサバ豆（0歳魚・平成19年生まれ）も漁獲されるでしょう。

来遊量は好調であった前年・平年を下回るでしょう。

（根拠）

漁獲の主体は、近年の漁獲パターンや現在の漁況経過から予測しました。

漁獲の主体となるゴマサバ1歳魚(平成18年生まれ)は、0歳魚として本県海域への来遊量が高い水準であったが、19年になってからは来遊がほとんどなく、系群としては低い水準であったと考えられる。

ゴマサバ0歳魚は、棒受網やまき網への混獲状況から前年より来遊量が多いと考えられる。総合的にみて好調であった前年・平年を下回ると考えられる。

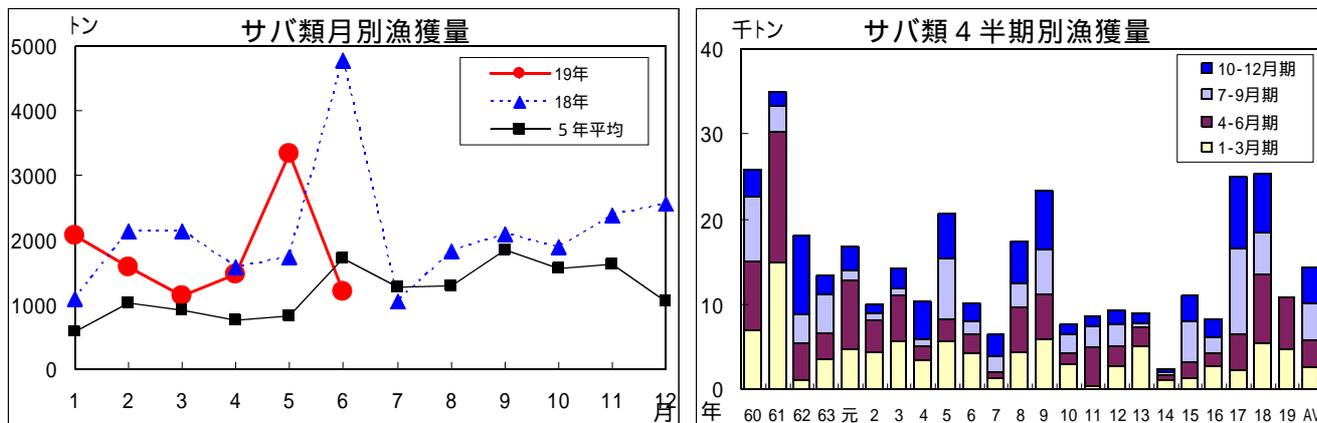


図 サバ類まき網漁獲量変化(4港計)

平年値は過去5年（平成14～18年）の平均値，平成19年6月30日までの水揚げ量を使用。

[マイワシ]

1. 漁獲量の動向（農林統計）

全国のマイワシの漁獲量は、昭和30年代から40年代にかけての不漁期の後、昭和48年頃から増加の傾向が見られ、昭和63年には449万トンまで増加しました。

しかし、平成元年から三陸沖を中心に漁獲量が減少し始め、その後もマイワシの若齢魚の減少等により、全国的に漁獲量は減少を続け、平成7年には66万トン、平成10年は16万7千トンとなりました。平成11年は35万1千トンとやや増加したものの、その後減少し平成17年は2万8千トンでした。

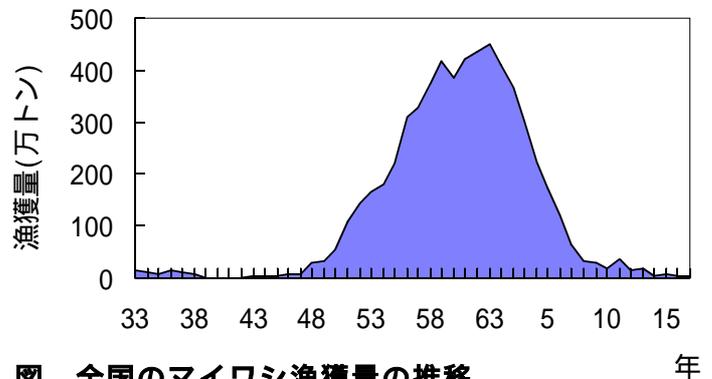


図 全国のマイワシ漁獲量の推移

2. 平成19年4～6月期の漁況の経過

【4港計（阿久根；枕崎；山川；内之浦）】

期間中甌島周辺にまとまった来遊が見られ、鹿児島県4港のまき網で中～大羽主体に1078.1トン（前年比176,445%，平年比76,265%）と前年・平年とも大きく上回り、10年ぶりのまとまった水揚げとなりました。

3. 平成19年7～9月期の見とおし

低水準ながら散発的な来遊があり、前年・平年を上回るでしょう。

（根拠）

マイワシ資源は全国的に依然として低水準にあるものの、昨年から本県や周辺の近隣県で散発的な水揚げが続いており、また北薩海域の棒受網でイワシ仔が水揚げされていることから、前年・平年を上回る来遊が期待できると思われます。

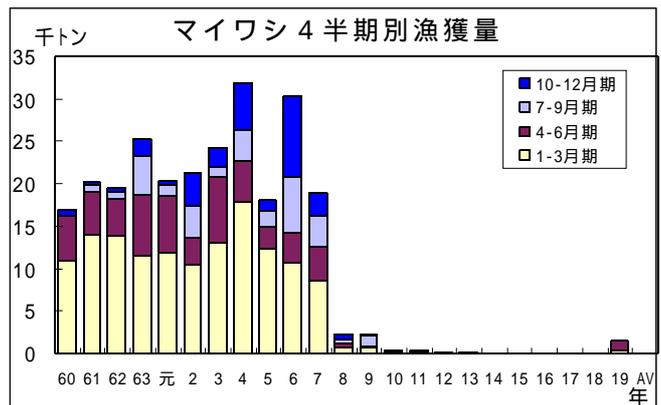
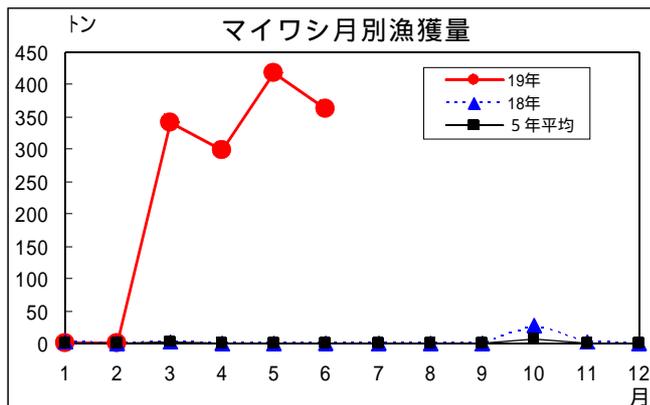


図 マイワシまき網漁獲量変化(4港計)

平年値は過去5年（平成14～18年）の平均値，平成19年6月30日までの水揚量を使用。

[ウルメイワシ]

1. 漁獲量の動向（農林統計）

全国のウルメイワシの漁獲量は、昭和30年代後半から40年代前半にかけて3万トン前後で推移していましたが、昭和46年から54年まで5万トン前後で推移しました。昭和55年以降、漁獲量は減少し昭和60年には3万トンとなりましたが、その後、増減を繰り返しながら、増加傾向を示し、平成6年に6万8千トンとなりました。近年では再び減少傾向に転じ、平成12年は2万4千トン、平成17年は3万5千トンでした。

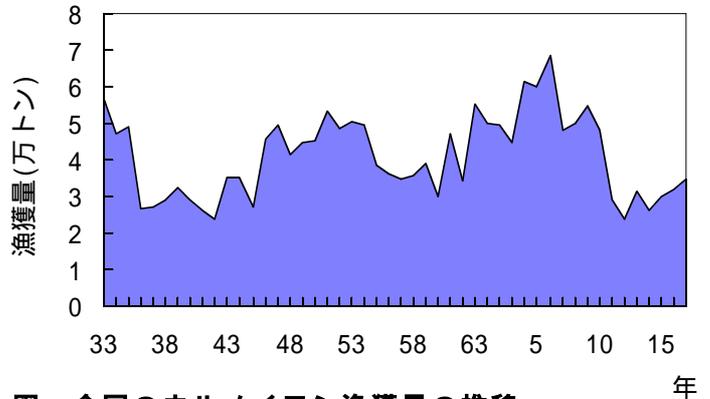


図 全国のウルメイワシ漁獲量の推移

2. 平成19年4～6月期の漁況の経過

【4港計（阿久根；枕崎；山川；内之浦）】

期間中、枕崎沖から宇治群島周辺にかけて漁場が形成されました。鹿児島県4港のまき網で1561.1トン（前年比158%，平年比550%）と、前年・平年を大きく上回りました。北薩海域の棒受網では124.6トン（前年比249%，平年比68%）と、前年を大きく上回ったものの、平年を下回りました。

まき網は1歳魚の中～大羽銘柄を漁獲の主体で、好調な水揚げが続いているものの、棒受網は0歳魚の小～中羽銘柄を漁獲の主体で、低調に推移しています。

3. 平成19年7～9月期の見とおし

まき網では北薩海域・南薩海域とも中～大羽銘柄（1歳魚・平成18年生まれ）が漁獲の主体となり、北薩海域の棒受網では小～中羽銘柄（0歳魚・平成19年生まれ）が漁獲の主体となるでしょう。来遊量は前年・平年を下回るでしょう。

（根 拠）

今期の漁獲の主体となる0歳魚（平成18年生まれ）の水揚げが低調に推移しており、来遊水準は高くないと考えられます。

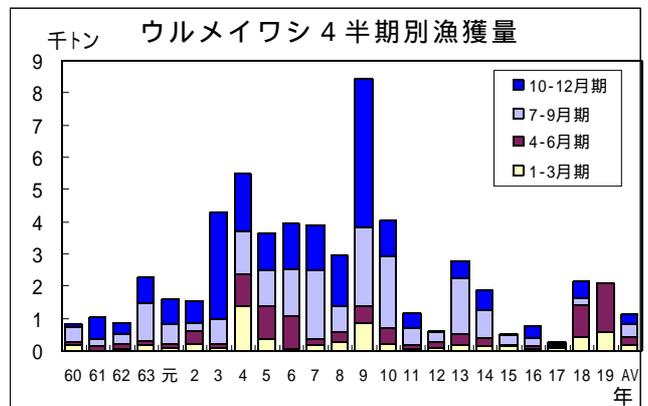
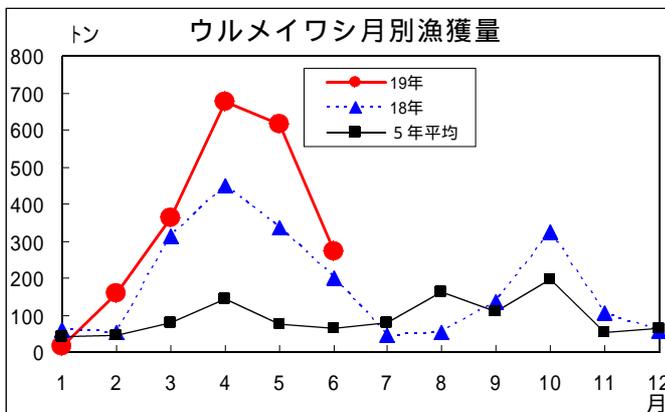


図 ウルメイワシまき網漁獲量変化（4港計）

平年値は過去5年（平成14～18年）の平均値，平成19年6月30日までの水揚量を使用。

[カタクチイワシ]

1. 漁獲量の動向（農林統計）

カタクチイワシの漁獲量は、昭和48年まで30万トン台で変動していましたが、昭和49年以降減少傾向となり昭和54年には13万トンとなりました。その後、徐々に漁獲量は増加し昭和59年には22万トンとなりましたが、昭和62年には再び14万トンまで減少しました。昭和63年以降は大きく増減を繰り返し、平成13年は30万トン、平成14年は44万トンでした。平成15年は過去最高の51万7千トンとなりましたが、平成17年は再び大きく減少し、34万7千トンとなりました。

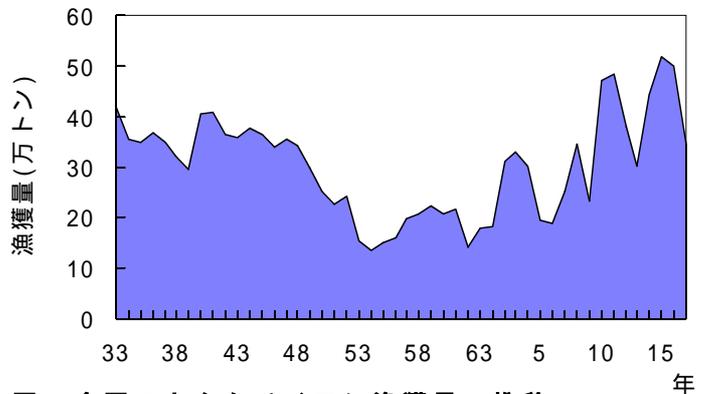


図 全国のカタクチイワシ漁獲量の推移

2. 平成19年4～6月期の漁況の経過

【4港計（阿久根；枕崎；山川；内之浦）のまき網及び棒受網】

期間中、北薩海域の沿岸域に漁場が形成されました。鹿児島県4港のまき網で340.4トン(前年比502%、平年比146%)の水揚げで、前年を大きく上回り平年も上回りました。北薩海域の棒受網では278.6トン(前年比145%、平年比112%)の水揚げで、前年を上回り平年並みの水揚げとなりました。

北薩海域の棒受網では5月以降小羽銘柄(0歳魚 平成19年生まれ)を主体に好調な水揚げが続いています。

3. 平成19年7～9月期の見とおし

小～中羽銘柄(0歳魚・平成19年生まれ)が漁獲の主体で、前年・平年を上回るでしょう。(根 拠)

周辺海域のバッチ網漁業の漁模様が、カタクチシラス主体に好調に推移していることから、来遊水準は高いと考えられます。

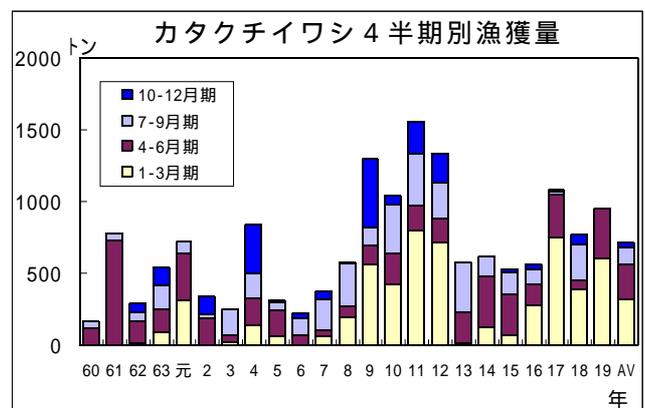
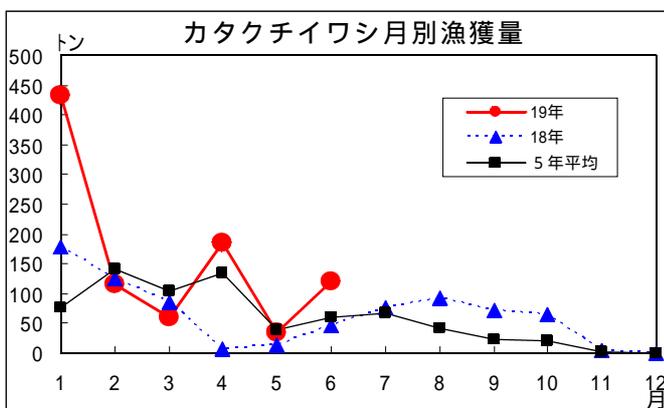


図 カタクチイワシまき網獲量変化(4港計)

平年値は過去5年(平成14～18年)の平均値,平成19年6月30日までの水揚量を使用。

[その他の魚種]

ムロアジ類 (4 港計)

1. 経年変化及び平成18年4～6月期の漁況の経過

ムロアジ類の漁獲量は、平成2年の21,700トンピークに減少傾向を示し、平成12年は、昭和58年以降最低の1,819トンとなりました。平成13年、14年は一端増加に転じましたが、その後は減少し平成17年は1,675トンとなりました。平成18年は若干増加し2,271トンとなりました。

平成19年4～6月は、主に薩南海域で漁獲があり、期全体では55トンの水揚げで、前年の41%及び平年の55%でした。

2. 平成19年7～9月期の見とおし

来遊量は前年・平年を上回るでしょう。

オアカムロ (4 港計)

1. 経年変化及び平成19年4～6月期の漁況の経過

オアカムロの漁獲量は、平成元年の5,300トンピークに減少し、平成6年には1,823トンとなりましたが、その後は増加傾向となり、平成10年は3,413トンでした。その後、減少傾向となり、平成18年は1,184トンとなりました。

平成19年4～6月は、主に薩南海域で漁獲があり、期全体では147トンの水揚げで前年の291%及び平年の47%でした。

2. 平成19年7～9月期の見とおし

来遊量は前年・平年を上回るでしょう。

マルアジ (アオアジ) (4 港計)

1. 経年変化及び平成19年4～6月期の漁況の経過

マルアジの漁獲量は、平成2年以降低調に推移しましたが、平成7年には1,430トンに増加しましたが、再び減少し平成11年は639トンでした。平成12年以降は増加傾向を示し、平成15年は3,150トンとなりました。平成16年以降は大きく減少し、平成18年は252トンでした。

主に北西薩海域で漁獲があり、期全体では188トンの水揚げで、前年の165%及び平年の68%でした。

2. 平成19年7～9月期の見とおし

漁獲の主体は、マルアジ小 (1 歳魚・平成18年生まれ)、マルアジ中・大 (2 歳以上) で、9月にはマルアジ豆 (0 歳魚・平成19年生まれ) が漁獲されるでしょう。

来遊量は前年を上回り、平年を下回るでしょう。

(根 拠)

漁獲の主体は、近年の漁獲パターンや現在の漁況経過から予測しました。

マルアジ小 (1 歳魚・平成18年生まれ) 及びマルアジ中 (2 歳魚・平成17年生まれ) の来遊量は、前年を上回り、平年を下回る水準であります。

マルアジ豆 (0 歳魚) は、例年どおり9月以降に来遊が見込まれますが、来遊量は現段階では判断できません。

総合的にみて低調であった前年を上回り、平年を下回ると考えられる。

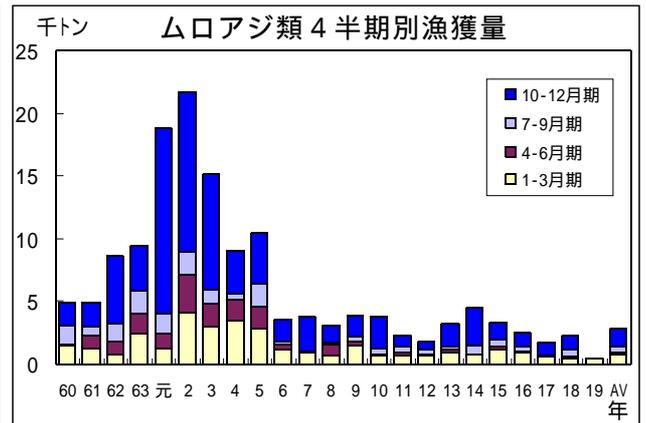
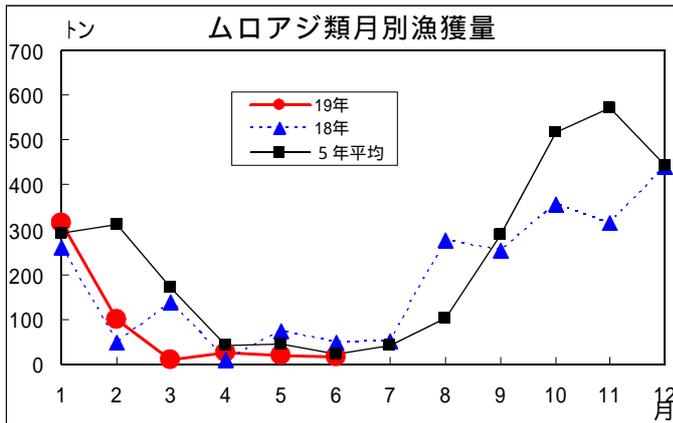


図 ムロアジ類まき網漁獲量変化(4港計)

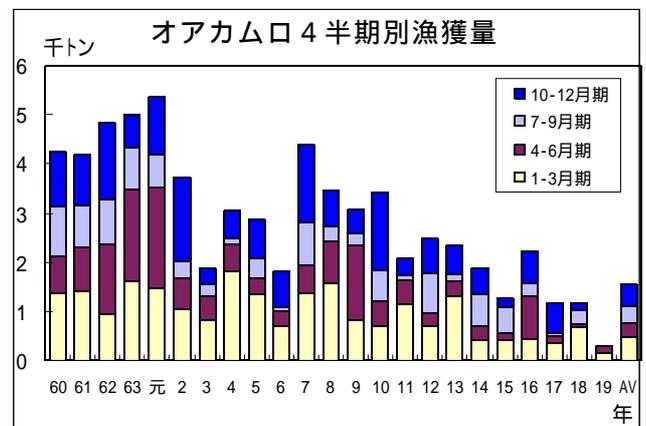
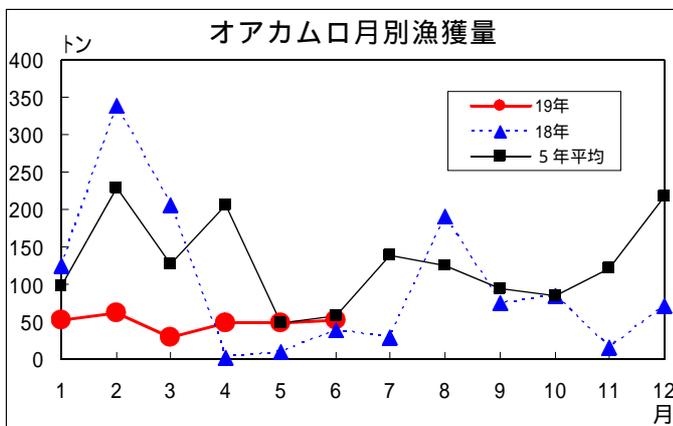


図 オアカム口まき網漁獲量変化(4港計)

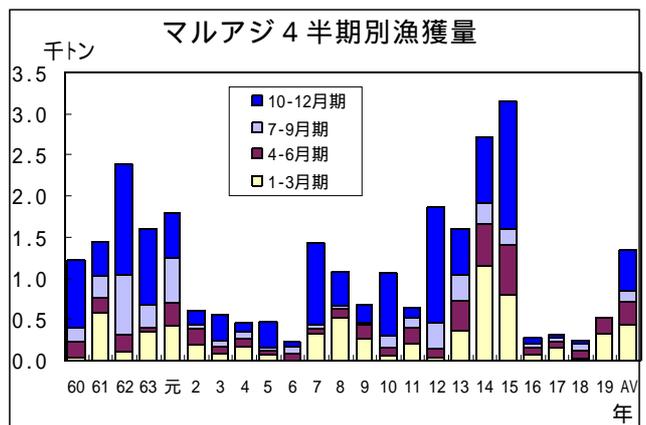
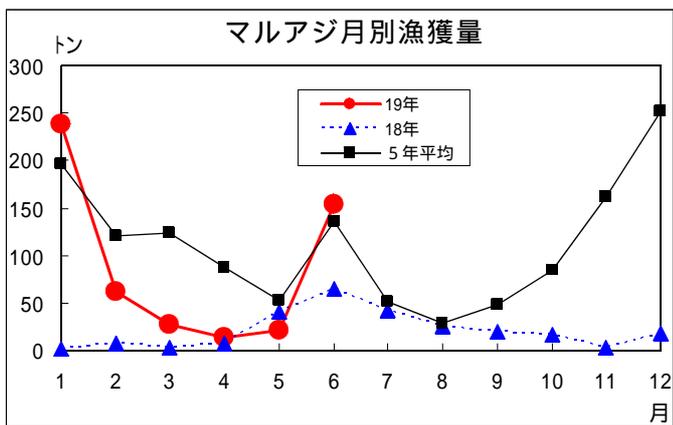


図 マルアジ(アオアジ)まき網漁獲量変化(4港計)

平年値は過去5年(平成14~18年)の平均値,平成19年6月30日までの水揚量を使用。

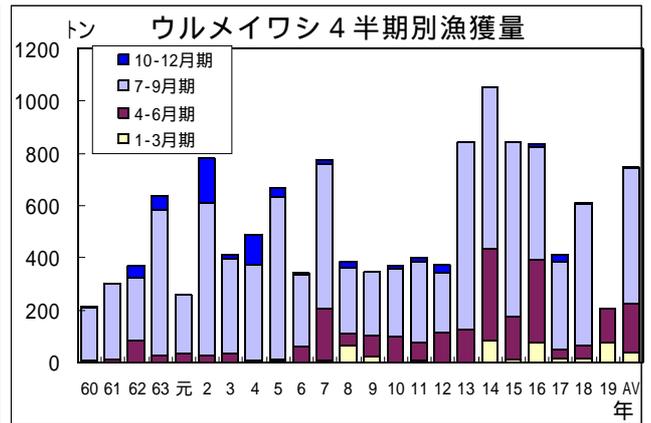
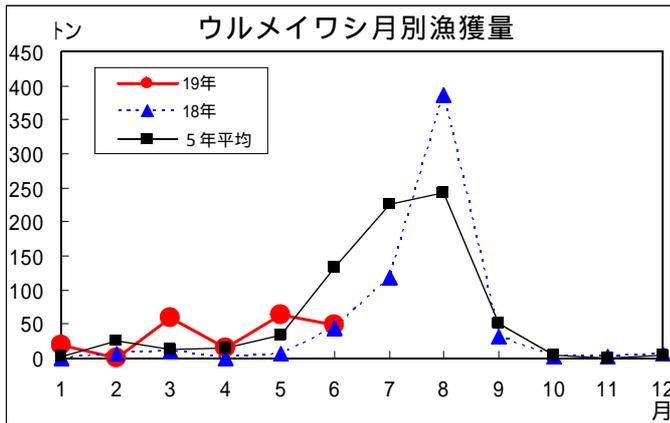


図 ウルメイワシ敷網漁獲量変化(阿久根港)

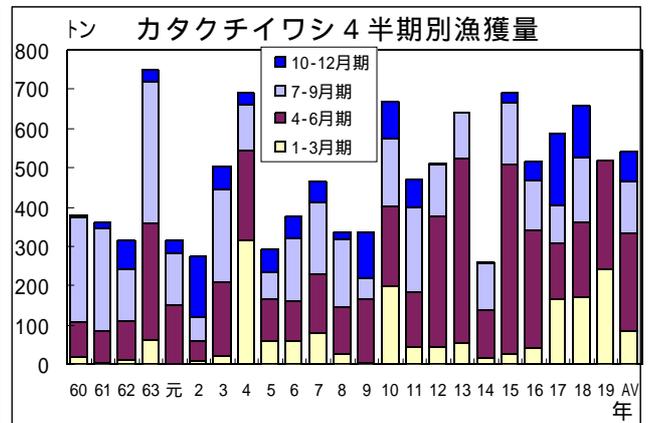
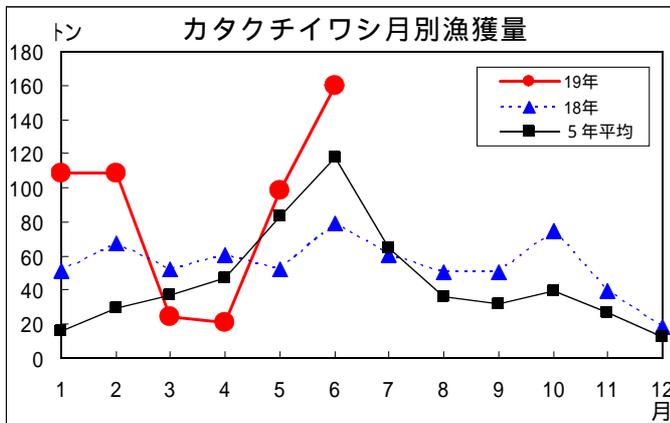


図 カタクチイワシ敷網漁獲量変化(阿久根港)

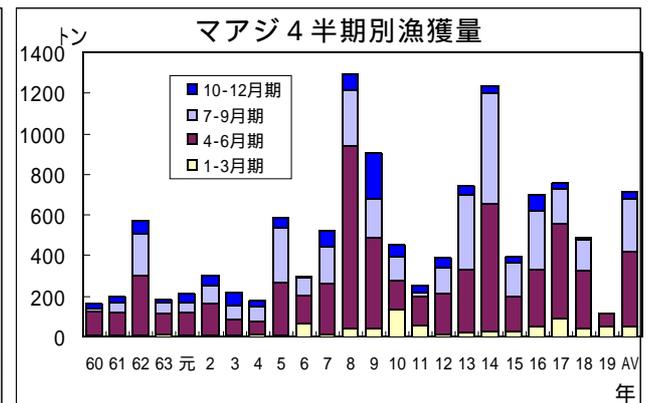
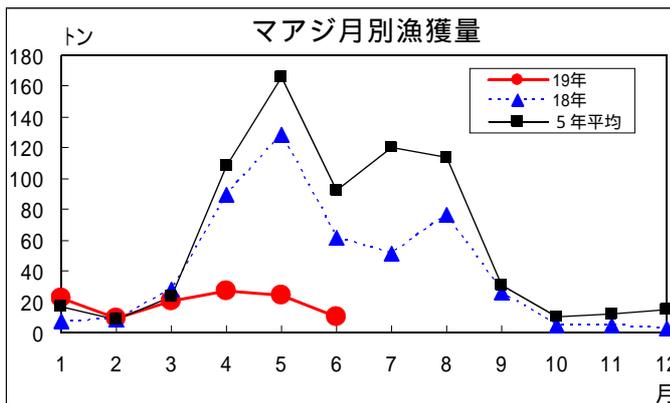


図 マアジ定置網漁獲量変化(内之浦港)

平年値は過去5年（平成14～18年）の平均値，平成19年6月30日までの水揚量を使用。

[シラス]

経年経過及び平成19年4～5月期の漁況の経過

バッチ網漁業の漁獲量は、西薩海域では平成11年の5,450トン进行ピークに減少傾向を示し、平成14、15年と1,000トンを下回り低調に推移しました。その後平成16年は3,507トン、平成17年は3,368トンと比較的好調に推移しましたが、平成18年は2,842トンと若干減少しました。

志布志湾海域では平成12年の1,407トン进行ピークに減少傾向を示し、平成14年は396トンまで減少しましたが、平成15年は842トン、平成16年は1,180トン、平成17年は1,147トンと増加傾向を示し、平成18年は1,444トンと好調に推移しました。

今期の西薩海域ではカタクチシラス主体に1759トンの水揚げで、前年の98%、平年の194%と前年並みで平年を大きく上回り、好調に推移しました。志布志湾海域ではカタクチシラス主体に826トンの水揚げで、前年の170%、平年の231%となり、好調に推移しました。

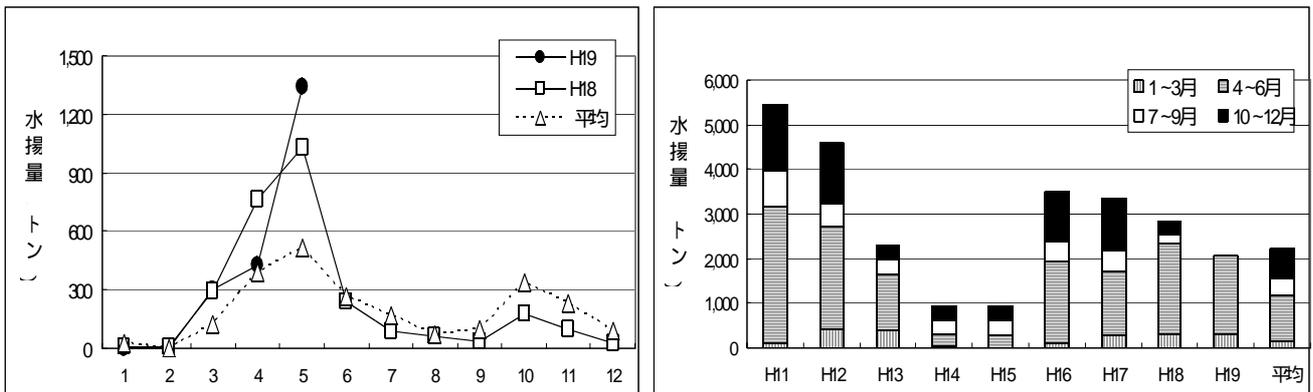


図 西薩海域バッチ網漁業の漁獲量変化(4漁協計)

平成19年5月末までの水揚げ量を使用。

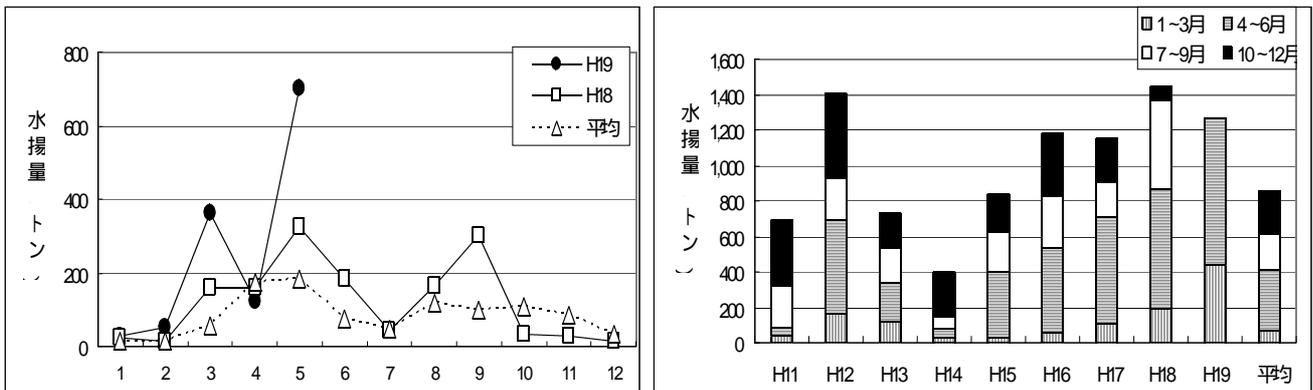


図 志布志湾海域バッチ網漁業の漁獲量変化(2漁協計)

平成19年5月末までの水揚げ量を使用。